

尾張国知多における仏教諸宗の展開

佐 藤 悅 成

はじめに

知多郡（旧尾張国智多郡）における仏教勢力は、宗教法人として登録されている寺院数の合計で三〇〇箇寺を越える。比較的狭い地域の寺院数としては、全国でも屈指の密度といえるが、しかし、愛知県全体としての各宗総計寺院数は四八〇〇余箇寺にも上るから、当該地域の数値は約七%ということになり、決して県全体としては多数を占めるということではない。

そこで次に、主な宗派に分類しての寺院数を資料として表1に掲げる。上段は『張州府志』⁽¹⁾記載の数値であり、下段は現在勢力としての数字である。

表1において明らかとなるのは、曹洞宗の勢力が他宗を圧倒しており、次に位置する浄土宗は、その半数にも満たない。

尾張国知多における仏教諸宗の展開（佐藤）

表1 知多の各宗寺院数

	『張州府志』	現在勢力
天台宗	一七	二一
真言宗	一八	二八
臨濟宗	一六	一〇
淨土宗	四六	六八
真宗	二六	三三
曹洞宗	一五一	一六四
日蓮宗	一	四

点である。また、尾張西北部の葉栗・中島・海部郡、及び三河地域に強固な教線を確保している真宗も、当地域ではその力を発揮していない。そして、鎌倉新仏教の内の禅宗として尾張北部から美濃にかけて勢力を伸長させ、強大な地盤を築き上げた臨済宗に至っては全く生彩を欠いている。

何故このような結果が生じたのであらうか。その点の考察に際し、まず知多の政治権力の推移を簡略に記して資料となし、次に各派の進出発展状況を分析して拙論を進めてゆくことにする。

宗教が社会生活における文化現象である限り、他と断絶した無関係な存在とはなり得ず、常に社会の内に位置付けられなければならない。つまり、現実の社会を運営する政治とも関りを持たざるを得ないということである。宗教の展開のみを独立した事象として把捉するのも一方方法であるが、展開の原因を形成する部分で必ず地域の支配層と関らざるを得ないのも事実である。それが時に互いの接近をなし、また離反から対立といった様相をも示している。そこに宗教勢力の伸長、又は衰退といった事態も生じてくる。迂遠な感はあるものの社会の流れを視野に入れて宗教を観んと試る。

知多郡全域は、古代において年魚市潟（現在の名古屋）を本拠地となして、熱田社に草薙剣を祀る地方豪族の尾張氏が國造として統一をなしていたと伝えられる。歴史上には、大化改新後の国郡制において郡司に任じられたことにより名称を見出すことができ、更に、壬申の乱（六七二）に際しては、大海人皇子の陣にあって功を立てたと見える。

当地域への仏教流入以前に形成されていた宗教勢力としては、熱田社がその中核をなしていたが、その大宮司職は八世紀前後に始まり、代々尾張氏が勤めていた。しかし、平安末期に藤原氏がその職を篡奪し、以後千秋氏として世襲された。後世、熱田大宮司職家は千秋氏を指し、中世には武士として歴史上にも登場している。『熱田宮略記』に依れば、南北朝時代に南朝方で活躍した千秋昌能もその一人であると伝える。

この地域における神道の中心に位置付けられる熱田社の大宮司職が藤原氏の系統であることが、後述する鎌倉新仏教各宗の展開において、特に浄土宗の展開に影を落している。また、源頼朝の母は熱田大宮司藤原秀範の女であることも記す必要がある。源義朝が平治の乱（一一五九）に敗れ、美濃に落ちのびて杭瀬川を下り、更に舟にて内海に着き、鎌田政家の縁者長田忠致（野間庄の莊司）をたよって野間谷に来るのも、大宮司家の陰ながらの支援を期待したことといえるかも知れない。しかし、義朝は忠致の裏切りによりこの地で非業の死を遂げるから、自らの地盤たる東国での再挙は果せぬままとなる。後に頼朝が鎌倉に武士政権を誕生させると、この尾張は東の武士勢力と、西の公家勢力の境界地帯となる因

縁を含んでいる。

これ等の事柄を経済的に観ると、熱田社を中心とする神国思想の勢力が莊園を取得し支配する一方で、仏教勢力も東大寺・弘福寺が莊園を開くが、一一〇一二世紀になると、多くは名目寄進であるが、皇室領・摂関家領が増加を見せ、更に武士政権の誕生以降は守護・守護代・地頭が実地支配するといった推移になる。例として、野間・内海莊は皇室領から関東御領となり、更に守護一色家支配へと変化する過程を挙げることができる。

ところで一二世紀頃迄には大宮司尾張氏の勢力も衰退し、代わってこの地でも平氏が台頭して、平頼盛は国守に任じられてその威を誇った。これに対しても藤原季兼の子季範は、反平氏の立場から尾張氏の女を正室に迎えて伝統勢力を手中に収め、自らが大宮司職に就いてからは女を源義朝に嫁せて源氏との関係も保った。ここに頼朝の誕生を見る。平氏の滅亡、鎌倉幕府の成立とともに情勢は一変して源氏・大宮司家の全盛となり、先に例とした野間・内海庄は白河天皇の関係する京都安樂寿院領から関東御領となるのである。しかし、承久の変(一二三二)に際して当地域の土豪の多くは京都方に付き、敗れて所領の一切を失ない、それ以後は北条氏の支配

がほぼ知多全域に及んだといつてもよい。鎌倉幕府滅亡後は大宮司家の一流が南朝に加わる例にある如く、土着勢力としての熱田社領は存続するものの、北条氏没領地を中心とした室町幕府の御料所に奉公衆が置かれ、幕府の支配が侵透した。

この新たなる支配層が移入された点に、後に曹洞宗の外護者となる水野氏（旧姓小川氏）が台頭してゆく素地があつたといえる。承久の変で、この地における新参者といえる奉公衆の一員であつた水野氏は、地域への新参者といえる奉公衆と同様に、熱田社領の一莊官として、水野と改姓し地方政治の霸權を目指すのである。鎌倉幕府の滅亡から南北朝の混乱という時代を背景にして再起を計ったのである。水野氏の存在がなければ曹洞宗の教線伸長も望めなかつたといわねばならないが、その点については後に詳述する。

その時代、知多は土岐氏支配の後を受けた室町幕府三管領の中の斯波氏が守護職に任じられていたが、實際には幕府四職であった、三河守護一色氏の管轄下に置かれていて、一色氏は大野庄に家臣の佐治氏を派遣して支配させていた。しかし、佐治氏は同じ一色家家臣であつた渥美田原城主の戸田氏と結び、知多を東西に二分して支配せんと試みた。このため主家一色氏と事を構えるが、一五世紀後半に一色氏はこの地

を撤退することで結着をみた。この佐治・戸田両氏支配に割り込むように、熱田社領の莊官をしていた水野氏がその勢力を伸長させてゆく。水野氏は旧姓を小川氏といい、美濃源氏の一流であつたが、承久の変に敗れて母方姓に変えて熱田社領に傭われていたのである。熱田社と源氏の結びつきの一端を伺わせている。

水野氏は佐治・戸田両氏、及び地域の有力土豪を次々と傘下に収めて知多全域の支配を確立する。それは、戸田氏の一族戸田守光が、水野姓に改姓したことなどが顯著な例といえる。更に水野氏は三河の松平氏と手を結び、刈谷に進出するものの、知多は次第に斯波氏の守護代織田氏の勢力下に收められてゆく。圧迫された水野氏の系譜は徳川家康の母方の祖父へと連なることをもつて歴史に名を残している。

一

次に仏教諸宗の展開を考察する。

天台宗 現在の本末関係は、地域内の過半数寺院が春日井市密蔵院（旧称薬師寺 嘉暦三年 一三二八に改称）末に位置付けられ、室町時代初に教団として再編成されたことを示している。資料に乏しく、各寺院の来歴にも不明確な部分も

多いが、特徴としては創建年代が不明であつても、再建又は中興年代は明らかなる寺院が比較的多いことである。

例示すれば以下の如くである。

岩屋寺（南知多町 別称千眼光寺・巖窟寺）靈龜元年（七五）元正天皇勅願により行基の開創と伝えるが、中世以降二度の火災⁽²⁾により資料を失なつていて、文化年中（一八〇四）一八一八年）に密蔵院より豪潮寛海が来つて再興した。当寺には大野城主佐治盛光寄贈の宋版一切経⁽³⁾が叢蔵されている。法海寺（知多市）は天智帝の七年（六六八）に創建され、天智天皇の勅願寺と伝える。近世初の兵火で資料を焼失したが、山内の中院については、伝として以下の中興年代が判明している。常光院（文禄二年一五九三）、大乗院（文禄三年）、吉祥院（慶長元年一五九六）の各年代である。その他、再建年の明らかとなる寺院を挙げれば、延命寺（大府市）享禄四年（一五三一）、安樂院（東海市）元亀元年（一五九〇）、法華寺（南知多町）文禄三年（一五九四）となつて、一六世紀末迄の年代に集中する傾向を示している。

この一因としては、勅願寺としての建立基盤を持つ寺院と、その塔頭寺院が大半を占めていて、それ等の勢力は中央の政治動向に著しく左右されたことが挙げられる。例えば、

尾張国に散在した広大な東大寺領莊園がやがて没落するの
は、東大寺の政治的地位の変動を反映したこと等である。

また、地域的特質に乏しく、地域の要請を反映した特殊な行事を有する寺院がこの中から育たなかつたことも影響しているといえよう。この点は、伊勢地方における丸興山庫藏寺、青峰山正福寺といった、海の安全（海上経済）に寄与する特殊な信仰形態を形成した寺院は、経済基盤を武士層に奪われる事態が生じた後も、その信仰ゆえに勢力を保ち得たのと対照をなす。東西に海浜を持ち、海と密接な地域である筈の知多において、上記の伊勢地方の如き海の宗教が育たなかつたのは、比較的平穏な内海という点にあるのであろうか。知多で海運が盛んとなるのは、江戸期の千石廻船の発達まで待たねばならないから、熊野水軍の系譜を地域内に持つ伊勢・志摩とはその点で大きく遅れをとつていたといえる。

また、武士政権の誕生は、自らの領地確保のため、皇室・貴族への名目的な寄進を清算した地方勢力の実地支配権の認知であり、旧い社会的制約から解放された武士が、自己の望む宗教を模索する時代に入ったといつてもよい。換言すればそこにこそ新仏教各宗が展開する素因があつたといつてよい。旧仏教寺院における莊園経済の破綻と、それに加えて、

旧支配層たる貴族とは一線を画されていた武士・庶民が、自らの信仰を選択決定することにより宗教の多様化が生じ、二重の圧迫を旧佛教寺院に与えたといつてよい。

教団としての再編成はこのような危機感を踏まえた上で行なわれたのであろう。密蔵院（慈妙が嘉暦三年に禅密兼学の葉上流を伝え、後伏見院より名を賜つて薬師寺より改称した）の流派たる穴太流に属する在り方が、禅宗の伸長の後を受けて有利に作用したとも考えられる。

真言宗 真言宗の展開も天台宗の場合と同様に、資料に乏しく寺院の来歴にも明確さを欠いている。その中で大御堂寺（美浜町）が中央の歴史に直接結び付く唯一の存在といえる。現在は豊山派に属し、鶴林山無量寿院大御堂寺と称し、その創建については、承暦年中（一〇七七～一〇八二）に白河天皇の勅願により草創されたと、当寺所蔵の天文三年（一五三四）三月の「古勸進帳」に記される。また、『吾妻鏡』の文治二年の項にその名が記されるので以下に掲げる。

文治二年閏七月廿二日癸卯。前延尉平尉康頼法師浴恩沢。
可為阿波國麻殖保々司元平氏家人。之旨。所被仰也。故左典厩
義朝墳墓在尾張國野間庄。無人于奉訪沒後。只荊棘之所掩
也。而此康頼。任中赴其國時。寄附水田卅町。建小堂。令

尾張国知多における仏教諸宗の展開（佐藤）

六口僧修不断念佛⁽⁴⁾

と記され、また同じく文治六年（建久元年）の項にも以下の如くある。

建久元年十月廿五日丙午。以尾張國御家人須細治部大夫為基。為案内者。到于当國野間庄。拝故左典厩廟堂_{平治有事奉葬}。此墳墓被掩荆棘不払薜蘿歟之由。日來者於閔東遙令遣懷給之處。仏閣排扉。莊嚴之粧遮眼。僧衆構座。転經之声滿耳也。二品怪之。為解疑冰。被尋濫觴之處。前廷尉康頼入道守于國之時。令寄附水田三十町以降。建立一伽藍。奉祈三菩提⁽⁵⁾。此事。為謝康頼入道殊功。兼日雖賜一村。彼任國者往年事也。行業定令廢絕歟。可加潤飭之由思食之處。鄭重之儀親覽之。弥憐禪門之懇志。更感古塚之結構給。又屈數十許輩龍象。被修廿五三昧勤行。口別綿衣二領。曝布十端施之給⁽⁶⁾。

十月廿七日戊申。御潔斎。令奉令奉幣熱田社給。當社依為外戚祖神。殊被致中心之崇敬⁽⁵⁾。

十月廿八日己酉。於小熊宿。須細大夫為基賜身暇。自鳴海迄于此所。候御駕前。當國內牢籠所領等令安堵⁽⁵⁾。

（傍点筆者）

上記『吾妻鏡』の内容は、考古学的見地と一致するもの

か否か、次に検討する。

大御堂寺の境内地より、連珠文・唐草文・花のぞき文等の文様を持つ軒平瓦が出土し、同寺の宝物館に展示されている。この出土瓦と同じ文様を持つ壺・瓶・瓦等が、同寺より北方の奥田平井古窯跡より発見されている。この古窯跡は、知多半島古窯跡群の編年で第二型式の前半とされ、年代では一二世紀後半と比定されている。第一型式古窯群は半島中部の、現在地名でいう武豊・半田・常滑の丘陵地帯に発見され、その発生を一〇世紀末から一世紀初とされていて、それより南に位置する美浜・南知多の古窯跡群は第二型式として分類され、下限を一四世紀末とされている。現在のことろ、この年代を大幅に修正すべき出土品もない所から、この説を採用してゆく。

古窯跡群の分布と、莊園分布にみる野間・内海庄の莊域とはほぼ符合し、更に一二世紀後半という年代も後述する如く莊園として成立した年代とも符合する。

野間・内海庄、及びその北方の枳豆志庄（東西両庄あり、現在の常滑市南部と武豊町を莊域とする）は白河天皇と密接に關係する京都の真言宗安樂寿院の所領となっていたことが、「安樂寿院文書」及び「昭慶門院御領目録」に記されて

いる。同目録によれば、康治二年（一一四三）に安樂寿院の所領になつたとあり、野間・内海庄は皇室領として出発したことを示している。しかし、この地に支院としての堂宇を設けた記述もなく、先の『吾妻鏡』にも、平康頼が尾張守として赴任した時、義朝の墳墓は荒れるに任せた状態であったと語るから、康頼が建立した一堂がこの地における大御堂寺の基礎ということができよう。

この文治二年（一一八六）という年代と、第二古窯跡群の年代が一二世紀後半という点で一致をみせて いるから、周辺資料から推して、大御堂寺の草創は一二世紀末が妥当と考えられる。

源義朝の墳墓を修復し、一堂を建て、水田を寄附して僧を住まわせ、菩提を弔わせた平康頼は後白河院の近臣で、平清盛と対立して鹿谷の密議（治承元年一一七七）に加わり、流されて後に出家し、法号を性照と称した人物である。当国へ赴任の時、その役職名は守が権守か、又は介、権介いすれとも判然としない。ただ、康頼と同様に後白河院と親しかった平頼盛が同時期に尾張守であつたから恐らく目代として現地へ赴任して來たのであろう。

平治の乱の主謀者たる源義朝は、敗れて後、家人鎌田政家

の進言を容れて野間・内海庄の荘司長田忠致を頼り來つたが、当地で長田の裏切りのため非業の最期をとげる。その後は義朝の外戚たる熟田大宮司家も勢いをなくし、平氏が代わって進出したのである。しかし、平氏滅亡後も池の禪尼との関係で、平頼盛は頼朝から厚遇され、引き続いて尾張守に任命されたのである。文治元年（一一八五）の壇の浦の戦い以後に、平康頼が一堂を建て得たのもこの事情による。また、頼朝は平頼盛の旧領を没官領から除外して安堵するなどしてい るから、換言すれば、幕府権力はこの時既に封建的主従関係を形成していたと見ることもできる。『吾妻鏡⁽⁷⁾』記載の、須細為基に所領安堵することなどは好例である。

建久元年（一一九〇）には頼朝自身が上洛の途上この地において父の菩提を弔う大法会を催行し、廟所としての再興にあたつたことから、一二世紀末以降、この地の宗教勢力としては大御堂守と一四坊がその中心に在つたといえよう。

しかし、守護代、地頭がその力を増大させるに従い、経済基盤を崩されて衰退を余儀なくされたのはこの地の真言宗も例外ではない。一四坊も『張州府志』に記される五坊⁽⁸⁾が知られるのみである。また、勢力の衰退した旧仏教の寺院が、政治の動向に左右される例を次に述べる報恩寺（美浜町）に觀

ることができる。

熱田社領の莊官から脱して、地域における政治支配力を強める水野氏は、勢力拡張の初期段階で報恩寺を真言宗から曹洞宗へ改宗させている。年代は明かでない（一説に天正六年、また一二年ともいう）が、水野貞守（曹洞宗の拠点となる乾坤院の開基）は天沢院（常滑水野氏の菩提寺）より雲閑和尚を招請して改宗させ、佐治・戸田両氏の勢力分断の一助にしようと試みている。地方武士の支配権確立に絡んで、勢力の衰えた旧仏寺院は翻弄され、取り込まれて新仏教の宗派に改められていった例を報恩寺は示している。

二

次に鎌倉新仏教各派より、当該地域に深く関係する部分について順次考察する。

浄土宗 浄土宗の進出は、拠点寺院の確保という点では曹洞宗とほぼ同時代といえるが、それを次の段階としての教線の伸長に時を移さず結び付けることができず、半世紀程停滞を続ける状態があつたといえる。結果として、当地域で多数を占めるに至つた曹洞宗の展開した後に参入して教線の拡大に努力することとなり、先行する曹洞宗の勢いに押され、遂

にそれを上回る勢力とはなり得なかつた。

活動の中心として、善導寺（東浦町）、常楽寺（平田市）、東龍寺（常滑市）の三箇寺を挙げができる。善導寺は嘉吉三年（一四四三）、信譽聖観（？）（一四七九）により創建と寺伝（一説には三河の信光明寺四代信譽の建立とも伝える）は伝える。しかしその後は教線の展開を積極的に進めることもできずに（この原因は後述する）衰退していたが、徳川家康の生母伝通院尼の出生地、また菩提所として天文一九年（一五五〇）に再興され勢力を得るに至つた。当寺は、曹洞宗の活動拠点たる乾坤院と近接しているが、各々教線伸長の中心としての役割を荷うのは約一世紀を隔ててのことになる。そのためこの地において曹洞宗の展開に浄土宗が直接影響を与えることはなかつた。常楽寺もまた徳川氏との関りにより勢力を伸長させ得た寺院で、開創は文明一九年（一四八七）であるものの、その後に生彩を欠き、天正一〇年（一五八二）の家康⁽⁹⁾逗留を契機としてその活動に勢いを得た。徳川氏が関与する点では善導寺と同様である。東龍寺も常楽寺と似た過程を辿つており、開創は貞觀一九年（八八七）に慈覚大師円仁が成して天台宗として出発しているものの、その後廢頽して応永一一年（一四〇四）浄土宗に改宗した。永禄三年

(一五六〇) 織田信長の勢力南下に伴つて制札と寺領を賜うものの、天正一〇年に信長は横死し、その際、家康が堺より三河への帰路立ち寄つたことにより勢力伸長の契機を得たのである。

浄土宗の展開を資料の上では二期に分類することが可能で、前期を一五世紀末から一六世紀中頃迄とし、確保した拠点を中心として拡大を試みてはいるものの、際立った成果を挙げ得ていない。また、有力支配層との関係も深く結ぶことはなかつた期間といえる。後期は一六世紀中頃以降を指し、徳川氏を中心とした政治勢力の伸長と歩を合わせるかの如く宗勢を伸長させている期間を指す。

その点を寺院の開創年代より示せば次の如くである。西方寺(南知多町) 天文八年(一五三九)、摂取院(半田市) 天文二年、宝樹院(常滑市) 大永元年(一五二二)等は前期に属する。そして、後期としては、信谷院(常滑市) 文禄元年(一五九二)、称名寺(豊明市) 文禄二年等が挙げられ、各々の年代と、前述の善導寺中興年代、家康の常楽寺・東龍寺逗留とを考え合わせれば、上記分類の後期に浄土宗展開の中心が在るといえよう。ここでいうと前期の知多では、曹洞宗乾坤院一世の逆翁宗順(一四三三~一四八六)の嗣、芝岡宗田下

の俗称乾坤三派が大きく門葉を広げ、特に亨隱派(亨隱慶泉三河東漸寺開山)から大中一介(一四四七~一五三二)が出て更に宗勢の伸長を成し、その嗣四哲(三獻有玉、靜室與安、壁渓慧球、華雲瑞薦)が大いに化を張つていた時代辺りに該当する。つまり、曹洞宗の發展伸長期に浄土宗は遅れて参入して来たといえる。

この遅れの原因としては、熱田社の勢力と浄土宗の宗旨とが対立する点を一要因として挙げができる。

前述した如く、五世紀頃迄に半島全域は尾張氏により統一されたと推定され、それ以降熱田社に草薙剣を祀る熱田大宮司家として君臨し、後には藤原氏の一流千秋氏が大宮司家となるものの、点在する荘域を支配して伝統的宗教勢力を構成していた。この古来からの神々を尊崇する神國思想と、浄土思想の軋轢が浄土宗の展開に影響していたといえる。

法然の専修念佛は、現実世界を五濁惡世と觀るため、結果として日本固有の神々を尊崇し、神の權威を背景として地域に土着的支配構造を築き上げていた勢力と鋭く対立するに至る。『淨土宗略抄』において法然は、娑婆世界を厭い捨てて、極樂に急ぎ生まれんとするなどを述べている。穢土として厭離すべき現実世界と、極樂として浄土を欣求するその思

想は、現世の否定であり、國家の鎮めとしての祖靈神の否定である。この観点は現実には熱田社の存在否定、又は神力の無力を主張することとなり、神國思想に依拠する勢力の反発を招いたのは当然の成り行きであつたといわねばならない。

その反発を代弁するのが興福寺であり比叡山であつた。延暦寺は王城鎮護を自負する存在であり、興福寺は藤原氏を大檀越としているから、宗廟大社を憚らない淨土思想を非難する急先鋒に立つたのである。この地域では、先に記したように熱田大宮司家は藤原氏の一流千秋氏が勤めていたことから、中世の淨土宗に一層の反発が加えられたことは容易に推察できよう。

結果として、教線の伸長は時代的に他宗から大きく遅れるのである。では、時代が下ることにより発展の機会を得たのは何故かといえば、真宗の急激といつてよい宗勢拡大と、それに伴う地方支配層との対立に原因があるといえる。一六世纪初頭より頻発する一向一揆は、尾張周辺地域にも飛火し、永禄六年（一五六三）の三河一向一揆、天正元年（一五七三）の伊勢長島一向一揆が起り、徳川・織田両氏は各自対策に苦慮し、武力をもつての鎮圧のほかに途はなく、その行使に踏み切るのである。

末法の意識にも媒介され、自己と自己の世界たる現世に絶望する淨土思想では、決定的宿命として自己の存在を規定することになり、その限りにおいて現世を変革する思想は最初から準備されていないことになる。真宗の急激な展開と、支配層との激しい対立は、支配層をして現世変革の意識を持たない淨土宗に眼を向けさせるのである。そこには、王道による現世の極楽と、仏道による来世の極楽を実現するといった、あたかも役割分担にも似た、支配者層の都合のよい解釈の淨土觀に曲げられていた部分があるといえよう。

いずれにしても、織田氏以前にこの地を支配した水野氏は曹洞宗を外護し、そのため曹洞宗の教線は非常な伸びを見せるものの、他宗は伸び悩むのである。その点からいえば、遅れて参入した淨土宗の伸びは異例といつてよいであろう。

淨土真宗 当地への進出については、新仏教宗派中最も早く、多数勢力となる曹洞宗に先立つこと約二世紀の一三世紀頃には既に拠点を得て足掛りとしている。しかし、その後の展開は全くといつてよいほど見られず、本格的な勢力の拡大は、結局曹洞宗と同時代となっている。

初期寺院の例としては、光明寺（常滑市）が挙げられる。寺伝によれば、当寺は聖徳太子の創建になり、醍醐天皇の勅

願寺で天台宗に属していたが、嘉禎元年（一二三五）に真宗へ改宗したという。

親鸞が三河に来つて説法をなしたのが嘉禎元年と伝えられ、以後真宗の活動拠点は三河にあり、文禄六年の三河一向一揆へと結び付いてゆくのである。

先述の光明寺ほかごく少数を除いて、真宗の展開は以下の寺院の年代により明らかなように、曹洞宗の展開時期と重なっている。

淨顯寺（半田市）応仁元年（一四六七）に蓮如が創建と伝えられる。西蓮寺（常滑市）明応六年（一四九七）に蓮如が天台宗より改宗。淨仙寺（美浜町）永正一七年（一五二〇）創建、誓休寺（同）文明年中（一四六九～一四八七）創建等が教線拡大の年代として明確な例である。

いづれにしても、一五世紀後半に加賀一向一揆が盛んとなる状況が、地域の支配層を注意深くさせたことは否めないであろう。支配基盤の脆弱な地域には急激に宗勢を伸長させ得るが、支配層が強力な地域では教線の伸びは抑制される。特に当地域の支配をなす水野氏は、対立する諸勢力を全て傘下に收める強い指導力を發揮し、自らは曹洞宗を外護するため、真宗の展開としては冒頭の表1の寺院数が如実に示

すように生彩を欠いたといえよう。

臨濟宗 この地における臨済宗の展開は、守護一色氏の動向に左右されている。拠点となるのは一色氏臣で守護代として支配に当った佐治氏の居城大野庄に在る慈雲寺（知多市）である。同寺の伝によれば、一色家（一色範光）の外護により觀応元年（一三五〇）に夢窓疎石（一二七四～一三五一）を開山に請して創建したと伝える。ただし、一四世紀中頃の尾張は斯波氏が守護に任じられており、一色氏は若狭・三河両国の守護であつて、尾張守護の兼任は一色詮範の代、明徳二年（一三九一）になつてからであるから、一色氏の外護による創建には疑問が残るといえよう。そこに約四〇年の開きはあるものの臨済宗の展開拠点でることに変わりはないので、その点に少し言及する。一色氏は公深—範氏—範光—詮範—満範……と続くが、当地域と関りを持つのは四代詮範（？～一四〇六）が尾張守護に任じられて以降のことである。範光は貞治五年（一三六六）に若狭守護、康暦元年（一三七九）には三河守護に任じられて嘉慶二年（一三八八）に卒し、その嗣子詮範が両国守護となるのである。慈雲寺開創と伝える觀応二年前後の頃には、範光自身が父範氏とともに九州の経営に奔走して転戦を重ねていた時代である。範氏は文和四年

(一三五五)に、範光は二年後の延文二年に相次いで九州を去り、京都に戻るのであるから、範光がこの地の臨済宗に外護を加えたとする同寺開創には検討の余地がある。ただし、詮範の臨済宗への帰依はよく知られた事柄であり、慈雲寺の名称が父範光の法号から出ていることから、開創の外護者を詮範と考へることはできる。また、慈雲寺の南に位置する大興寺は寺伝を欠くものの、範光の父範氏の法号大興寺殿古峯道猷から寺名を採つたことは明らかで、周囲の状況から、同寺も詮範の外護による転宗もしくは開創といえよう。また、詮範自らは明徳年中(一三九〇～一三九四)に慈光寺(知多市)を大興寺の西に開創している。守護代佐治氏も、慈光寺・大興寺に近接する地に普明院を建立して主家と同じ臨済宗を外護している。

上記寺院の年代から、臨済宗の当地域への進出は一四世紀中頃に始まつたといえ、それは曹洞宗の進出(拠点たる乾坤院の創建を指す)に先立つこと一世紀といえる。曹洞宗が展开する過程において、臨済宗からの転宗も見られることが、進出年代の違いを示している。例としては、円通寺(大府市)を挙げることができる。その開創は天平元年(七二九)行基の手によると伝え、当初法相宗に属していたが、貞和四年(一

三四九)夢窓疎石を中興開山として臨済宗に転じ、更に文禄三年(一五九四)曹洞宗に改宗する経過を示している。この転宗年代迄に臨済宗の勢力に著るしい低下が見られるのであるが、その主たる原因是、一色氏の当地域からの撤退と、守護代たる佐治氏を凌ぐ勢力になる水野氏が外護した曹洞宗の伸長にあるといえよう。

一五世紀初になると守護代佐治氏は主家一色氏に背き、同じく一色氏家臣で渥美田原の戸田氏と盟約を交して知多を東西に二分しての支配に乗り出す。戸田氏は今川氏に心を寄せ、その意図を受けて海を渡り当地に勢力を扶植せんとしたものである。その結果、文明年間(一四六九～一四八七)に一色氏は当地域を撤退し丹後へ去らざるを得なくなつた。この一色氏と佐治・戸田両氏の主従による争いは、支配力の強化を望み雌伏していた水野氏に機会を与えることとなり、その一環として水野氏は文明七年(一四五七)に一族の寺として乾坤院を建立するのである。一六世紀初迄に佐治・戸田両氏とも水野氏に屈伏して支配下に入り、両氏は宗派も曹洞宗に改めて、政治的にも宗教的にも当地域の水野氏支配が完成するのである。佐治氏は永正一二年(一五一六)に齊年寺(常滑市)を創建し、分家の内海佐治氏は永正五年に性海寺(南知多町)

を、また戸田氏は天文三年（一五三四）に全忠寺（美浜町）を建立し、水野氏の帰依した曹洞宗を外護するのである。

この動向は当地の臨済宗にとって致命的な打撃となり、宗勢伸長に生じた欠くというよりも、現勢力の保持に力を尽くさざるを得なくなるのである。また、臨済宗展開の主力は地域として尾張北部に在り、瑞泉寺（犬山市）を中心として北へ伸長し、美濃土岐氏の外護を受けて強固な地盤を確立するため、当地域では積極的姿勢を欠いた状況が生み出されたのである。

曹洞宗 展開の中心となるのは乾坤院（東浦町）であり、時代としては創建の年、文明七年以降に活発な教線の拡大を示している。外護者となるのは熱田社領別納地の莊官（地頭）水野貞守（？～一四八七）である。俗縁に連なると伝える逆翁宗順（一四三三～一四八八）を請して建立した乾坤院（逆翁の師川僧慧濟を勧請開山となし、逆翁は二世となる）の門葉は、三世芝岡宗田下に三哲（俗に乾坤三派と称され、亨隱慶泉、周鼎中易、太素省淳を指す）が現われて急激な伸長をなし、当地域では特に亨隱門下に大中一介（一四四七～一五三二）が大いに化を張った。そして大中下に四哲（三獻有玉、碧溪慧球、華雲瑞勲、靜室與安）が出て、中でも靜室の門派が知

多において栄えたといえる。

水野氏の曹洞宗への帰依は、乾坤院の建立に端を発し、天沢院（常滑市）文明一二年、伝宗院（東浦町）天文一七年（一五四九）、春江院（名古屋市緑区）弘治二年（一五六六）をそれぞれ開創している。これは、政治上の必要性から分家を要衝に配して他の勢力を従属させてゆく過程で、宗教上の必要性から分家がそれぞれの菩提寺を建立したといえる。政治勢力としての水野氏に従属して曹洞宗に帰依した佐治氏は、前出の斎年、性海両寺を開き、また、戸田氏は天文三年（一五三四）に全忠寺（美浜町）を開創する。その他、佐治氏の系統に属す竹村氏は全昌院（常滑市）を天文元年（一五三二）に、水野氏に連なる久松氏は洞雲院（阿久比町）を明応二年（一四九三）に建立したことなどを例示すれば、水野氏の支配は、政治・宗教の両面に及んでいたことが一層明確となる。

曹洞宗展開の詳細については拙論「逆翁宗順と尾張の曹洞宗」正・続二篇を既に公としているのでそちらに譲るが、小論冒頭に掲げた表の如く、曹洞宗が多数勢力となる一因は、拠点確保から発展初期にかけての外護者の動向が大きく影響していたといえる。同様な例としては、後に浄土宗が伸長す

尾張国知多における仏教諸宗の展開（佐藤）

るのも、徳川氏という外護者の動向が大きく関わったことが挙げられる。先述の常楽寺に住した典空顕朗は徳川家康の従兄弟という俗縁があり、東龍寺の祖誕は典空の兄にあたる。この関係により徳川氏の保護を受けて浄土宗はその教線を伸長させ得たといつてもよいであろう。

結語

地域における支配者の政治的動向が、直接宗教勢力の興隆を左右したところに、知多の仏教諸宗展開の特徴がある。一莊官から身を興こし、権勢を誇った水野氏にとって、政治的に自らの傘下に組んだ諸氏の全てを、宗教的にも自らが帰依した曹洞宗に統一させて支配力の強化を計つたのである。換言すれば、曹洞宗に帰依して菩提寺を創建することが従属の証しとなっていたともいえる。

その点についての論考は前出の拙論に譲るが、一五世紀末から一六世紀初にかけて、この地の武士勢力に曹洞宗が広まり、そして曹洞宗でなければならなかつた理由は、覇權を得た水野氏が、政治支配の重要な方策として宗教を位置付けて積極的に取り組んだことにあるといえよう。

しかし、宗教者の立場としては、自らの宗派を伸長させん

と化導に努める各宗の諸師にとって、政治勢力に利用されるといつてもよいこの状況は望ましいものではなかつたといえる。しかし、一方便としてこの状況を容認し、世俗の権力の移ろいを透視することにより、宗教の本質を歪めて不当に迎合することを避けていたといえる。その点について曹洞宗を例に採れば以下の如く観ることができる。水野氏は知多を勢力下に収めた後、三河への進出を計り松平氏と接近するものの、結果として斯波氏の守護代であつた織田氏の南下によりその支配力を漸減させてゆく。その後に信長横死、家康の登場と政治勢力に激しい転変はあるものの、曹洞宗の諸師は宗教の意義を明確に把握して教線の伸長に努め、外護者と運命を共にすることはなかつたのである。具体的には乾坤三派の門葉の広がりと、大中下四哲の活躍がそれを明かしている。

史的側面から仏教各宗の展開について一瞥したが、中世末から近世初にかけては、宗教の本義とは別の次元で地方支配層の政治的興隆、衰退の影響を大きく被る時代であつたことを、当地域の仏教諸宗の展開は示している。

(1) 表の上・下段の数字に開きが大きい宗派もある。中でも真言

宗の増加については、塔頭などが独立した宗教法人として登録されたことに原因がある。また、浄土宗の場合は、『張州府志』完成（宝暦二年 一七五二）後の尾張徳川氏の外護によると考えられる。

表の数値には各宗系の新興宗教に分類せられる寺院は加算していないことも付記しておく。

(2) 永享九年（一四三七）の火災と、慶長五年（一六〇〇）の九鬼嘉隆来襲による焼打を指す。後者は西軍に属した水軍九鬼氏（嘉隆の嗣子守隆は東軍に属し、東西いづれが勝利を收めても家名を存続させるべき配慮をなしているのは戦国時代の例に洩れない）が、東軍の後方攬乱を狙つて起こした行動である。

岩屋寺は昭和二十四年に真言宗へ転宗し、現在は尾張高野山と称している。

(3) 一色家守護代、大野城主佐治右衛門尉盛光が、仏具二六点を添えて宝徳二年（一四五〇）に寄進した。一切経の入手経路が判然としないが、梅尾高山寺に收められていたものであることは、高山寺の住僧高弁・経弁が転読した旨の記録から判明している。

佐治氏は近江に領地を有していたことがあるので、その辺りに鍵があるかもしれないが、現在のところ由来については不明である。

(4) 増補新訂国史大系 第三二卷 『吾妻鏡』前篇（吉川弘文館

昭和三九年）二三七

(5) 同右 三九七～四〇〇

(6) 『愛知』「史蹟郷土史」（講談社 昭和五七年）一一一aを参考照

(7) 前出『吾妻鏡』「建久元年十月廿八日」の項。

(8) 安養院・円明院・竜松院・慈雲院・密蔵院を記すが、現在は密蔵院、及び他の三坊を吸收した安養院を残すのみである。
織田信孝は羽柴秀吉のため岐阜城での戦いに敗れ、天正一一年（一五八三）安養院で自害した。

(9・10) 家康と常楽寺の関係は、当寺第八世典空頼朗の母が家康の生母伝通院於大の妹であることに始まる。また、東龍寺に住する祖誕は典空の兄と伝えられるから、両寺の住持職に家康の従兄弟二人が任じていたことになる。そのため、永禄三年（一五六〇）桶狭間の戦に際し、大高城より常滑を経て常楽寺に至り三河へ帰った。また、天正一〇年（一五八二）信長横死に際して、堺に居た家康は伊勢から大野へ渡つて東龍寺に一旦留まり、続いて常楽寺で状勢を見極めて三河へ帰ったという。それ等の縁により以後浄土宗に力を添えたのである。

(11) 大正藏第八三 一九五b 「黒谷上人語燈錄」卷第一二
淨土門トヒハ、コノ婆婆世界ヲイトヒステテイソキテ極樂ニ

尾張国知多における仏教諸宗の展開（佐藤）

ムマルル也

(12) 「興福寺奏状」（解脱上人貞慶筆）を以て朝廷に惠修念佛禁止を訴えた。

大日本佛教全書第六一 一三c

※ 昭和五九年八月、岩屋寺藏宋版一切經を同寺のお計いにより調査する機会を得た。その結果を本学の長谷部幽溪教授が「岩屋寺藏宋版一切經とその成立史的背景」（『愛知学院大論叢』一般教育研究第三三卷第二号 一九八五）と題されて詳細に論考された。その際、調査の末席を汚した筆者にも、知多の仏教の展開について纏めるようご指示を頂戴したが、筆者の事情によりご好意に添うことができなかつた。その後筆者は、曹洞宗の展開について考察を加える機会に恵まれたので、蒐集した周辺の部分についても今回掲載させて頂くこととした。

長谷部教授の上記労作と、拙論二篇の補足資料として観て頂ければ幸甚である。